ニッケイ新聞　2018年　3月27日（火曜日）

樹海

タブー破りが得意な歌手、井上祐見

井上祐見（41、愛知県豊橋市）はタブー破りが得意な歌手だ。2007年8月に「井上祐見という不思議な歌手」という特別コラムで、《なんの商売上のメリットもないのに、彼女はかれこれ9年間もブラジルに通って書いた。プロとしてはタダで歌うのはタブーだ。最初からそれを破っていた▼「NHKのど自慢」の番組収録が1998年に聖市で行われ、それを見た彼女は「こんなにたくさんの日本人のお爺さん、お婆さんがいるんだ。この人たちの前でぜひ歌いたい」と決心し、無謀にもその年からやってきた。当時デビューしたての21歳、初海外旅行がブラジル公演だった。彼女が凄いのは3年目に移民女性の心情を歌ったオリジナル曲『ソウ・ジャポネーザ』をひっさげてきたことだ。彼女から「いつか移民のことを歌った曲でアルバムを作りたい」という夢を聞き驚いた。たとえば、日本で本を出そうと原稿を東京の出版社に持ち込んでも普通は丁重に断られる。「移民モノや日系人モノは売れないんです」というのが決まり文句だ。まして栄枯盛衰の激しい歌謡界で移民モノが売れるとは思わない▼百周年の時には『ありがとう笠戸丸』という2曲目も作ってきたので、「本気でアルバムを作る気か?!」とさらに驚いた。百周年までは毎年来たが、その後は来たり来なかったり。メリットもないのだからムリもない▼唯一のメリットを探すとすれば、中嶋年張マネージャーが言っていた「彼女の知名度では日本国内の営業で30分間歌えばいいとこ。でもブラジルではたっぷり3時間も歌わせてくれる」という言葉だ。歌手としての経験は▼彼女はその晩、「私は皆さんと出会わなかったら歌手を続けていなかったかも。高木社長は昨日まで10日間も入院していたのに、こんなに盛大な歓迎会をやってくれた。なんと感謝していいか分からない」と感無量の様子。マネージャーの言うことが振るっている。「『歌手は私生活を見せない方が良い』とよく言われますが、コロニアとは表裏のない長い付き合いをしてきた。むしろ、この20年間に家庭を作ったんだからブラジル式には紹介しなきゃ、という感じ。その方がコロニアの皆さんには喜んでいただけると思って、みんなで来ました」。見事なタブー破りだ▼この日のために300キロ先から駆け付けた大ファン、グアタパラ文協の茂木常男会長も「7、8回は来てもらった。彼女が『グアタパラは自分の第二の故郷だ』って言ってくれたのが嬉しくてね」と目を細めた▼切ないことに、ブラジル移民の側から祖国に捧げる曲は数え切れないほど作られてきた。井上祐美の曲の場合、日本側から移民を歌った曲であることが画期的だ。プロの曲としては初ではないか。そこに意味がある▼今、世界は移民労働者問題に揺れているが、歌謡曲という大衆芸能のジャンルで、その現象に無謀にも真っ向から取り組んだ曲だ。日本の日本人は通常、海を超えた人を忘れる。ブラジル移民だけで25万人、中規模の市人口が丸ごと渡ったのに、その歴史は教科書にほぼでてこない。関心がない▼だから移民を歌った曲は日本では注目されない。彼女と日系社会とのつながりが縁で、いつか彼女が注目されるのであれば、それはまさしく『コロニアが育てた歌手』である証拠だ。ぜひ次のタブー破りは「移民モノは売れない」に挑戦し、「移民アルバム」を成功させてほしい。あと100年かかってもいい。100年後も歌い継がれる曲を遺して欲しい。

（深）

21日に聖市で行われた歓迎会の様子